

Libro de Apolonio II

Translated by OTA Tsuyomasa

Abstract

The legend of Apollonius belongs to a form of fiction known as the Greek romance, which was cultivated by the Greek-speaking peoples of the Mediterranean during the first and fourth century. While the legend has been translated into Latin and the romance languages, the original text in Greek has unfortunately been lost.

The Spanish version appeared in the thirteenth century. It was apparently written by an unknown cleric and is in the erudite form of ‘cuaderna vía’ (four-fold way), a style which has been called ‘mester de clerecía’ (scholars’ art), as compared with ‘mester de juglaría’ (minstrels’ art).

On this occasion, a translation has been provided from strophes 181 to 384.

アポロニオの書Ⅱ

太田 強 正 訳

「アポロニオの書」は1世紀から4世紀にかけて流行した所謂「ギリシャ・ロマンス」が大元であるが、それがラテン語、ロマンス諸語へと訳され、スペイン語版は12世紀に出たようであるが、誰の手になるのかはわかっていない。ギリシャ語の原本も失われている。

スペイン語版は恐らくは聖職者が書いたものであろうと言われていて、メステル・デ・クレレシーア（mester de clerecía）に属するものである。これは中世スペインの主に聖職者による教養階級の文学の流派を意味し、文字の読み書きのできない吟遊詩人（juglares）によるメステル・デ・フグラリーア（mester de juglaría）と対をなすものである。本作品はクアデルナ・ビーア（cuaderna vía）と呼ばれる1行14音節同音韻4行詩で書かれていて、656連からなるテュロスの王アポロニオの奇伝叙事詩である。

今回は181連から384連までを掲載する。

訳は言葉が違うので韻を踏ませることはできなかったが各行ごとに付けた。そのため日本語として通るように原文にない接続詞などを補わなければならない箇所があった。

人名は原文通りにスペイン語読みに、地名は日本で普通に行われている表記に従った。

訳に当たっては現代スペイン語訳の他、英訳を参照した。また部分訳で

はあるが日本語訳も参考にした。

本稿は Clásicos Castalia の Libro de Apolonio Edición de Carmen Monedero に基づいている。

- 181 皆が彼女を褒め、アポロニオは黙っていました
王はなぜ彼が話さないのか考えていました
王は彼に尋ねて言いました自分は感嘆している
彼は他の者皆とずれていると
- 182 アポロニオは確固たる男として答えました
—“王様、あなたのお嬢様に関しては上手とかそうでないと申し上げません
“しかしもしわたしがピウエラ¹¹⁾を弾くなら
“皆様が皆もっと素晴らしい音だと分かるような音を奏でるでしょう”
- 183 “あなたのお嬢さんは良く理解しています
“基礎がしっかりしていて、良く通じています
“しかしそれでも完璧な達人とは思わな方がいい
“もし私が歌ったら彼女は負けたと思うべきです
- 184 —“友よ、と彼女は言いました、神様があなたを祝福してくださいますように
“あなたの優しい恋人、もしいるのなら、彼女への愛のために
“ロタカジグ¹¹⁾で祝ぎ歌を歌ってください

“もし歌ってくれなければ、あなたは私に尊大な悪口を言ったことになりますよ”

- 185 アポロニオは婦人を不快にさせたくありませんでした
彼はビウエラを取って弦を上手に調整しました
そして王冠をつけていないと弾けないと言いました
わずかでなものであっても自分の権威をおとしめたくなかったのです
- 186 この言葉に王はとても喜びました
王冠が彼の苦しみを和らげてくれるように思えました
自分の王冠の中から一番良いものを持ってくるように命じ
それを上手な弾き手であるアポロニオに与えました
- 187 テュロスの王が王冠をつけると
幾分悲しみが軽くなりました
分別を回復し顔色が良くなって行きました
しかし苦悩を忘れたわけではありませんでした
- 188 アポロニオは婦人の方にちょっと目を向けました
彼女は少し恥ずかしがっていました
アポロニオは非常に似た琴を弾きました
彼女は内心喜んでいました
- 189 アポロニオはとても優しい音を奏でました
歌曲、バラード、震える半音でした

彼の声は皆の心を明るくしました

彼女は毒針（恋）に刺されました

190 皆口を揃えて言いました

アポロもオルフェウスもこんなに上手に弾けないと

歌は婦人のはとても褒めました

アポロニオの歌は全然褒めませんでした

191 アルチトラストレス王はこれ以上満足しないでしょう

王国か豊かな伯爵領を得たとしても

彼は大声で言いました―“私は生まれてから

こんな完璧な人間を、私の考えでは、見たことがない”

192 ―“父上、と婦人は父なる王に言いました

“あなたは私にあなたの愛ゆえに任されました

“私ができるだけアポロニオの世話をすることを

“このことであなたがどれだけお気に召しているかかって欲しい
のです”

193 ―“娘よ、と王は言いました、すでにお前に認めている

“アポロニオがお前の師匠になるように、彼を受け入れなさい

“お前が持っている私の宝を彼にあげなさい

“彼が満足することでお前が喜ぶように”

194 王がこう言ったので、父の了解を得た娘は

明るく満足してアポロニオの方を向きました

—“友よ、と彼女は言いました、あなたは王の許しを得ました
“私があなたの弟子になったら、あなたに給料を払いたいと思います

- 195 “あなたに二百キンタル¹²⁾の良質の金をあげましょう
“同量の銀と多くの召使も
“あなたは美味しい食事と上等のワインも手に入れるでしょう
“こういった物で、あなたは力を取り戻すでしょう”

- 196 アポロニオは喜び満足しました
なぜならわずかの間に多くを得たからです
彼は婦人の面倒をよく見て、喜んで彼女を教えました¹³⁾

- 197 いっぽう彼女は研鑽を続け
間もなくアポロニオ王に引かれて行きました
恋心が彼女の中で燃え上がり
とてもやつれて床に伏すほどでした

- 198 人々は彼女を見てくれる医者を探しました
すべての医術に通じているような
しかしそこにはどんな医術も策も見つかりませんでした
彼女の病気を癒すような

- 199 皆が彼女の病気を悲しんでいました
本当の事を知らなかったからです
アポロニオもひどく悲しんでいました

確かに今までになかった大きな苦悩の中で

- 200 アルチトラストレス王はひどく心を痛めていました
自分の娘だったので当然のことでした
しかしアポロニオには大きな慰めを感じていました
娘に対する愛情を彼にも抱いていたのです
- 201 ある日王は馬に乗り
海辺にある市場に行こうとしました
友であるアポロニオを呼ばせ
自分と一緒に気晴らしに出かけるように頼みました
- 202 王は彼が気に入っていたので、手を取りました
二人は海辺で多くの腕の良い職人を見ました
町人の男達や女達もいました、とても良い（繁栄の）印です
二人は市場を出て砂浜に行きました
- 203 彼らはお互いに満足してこのように歩いていると
三人の皆立派な服装をした若者がやって来ました
皆王達の子息で、良く教育を受けた者たちでした
彼らは非常に名誉ある人物として歓迎されました
- 204 彼らは皆すぐに求める事を話しました
すぐに自分の故郷に帰れるように
皆王のもとにその娘をもらいに来たのです
もし彼女を結婚するために得られれば

- 205 “王様、と彼らは言いました、すでに以前
“私たちはあなたの娘さんを妻にしたいと申し出ました、それぞれの王国と引き換えに
“あなたは答えを引き延ばしました、私たちは確信しています
“あなたの答えを聞くために私たちはあなたのもとへ戻って参りました
- 206 “私たちは私たち自身の間でこのように取り決めています
“あなたが誰に彼女を与えようと私たちは満足です
“私たち三人はあなたを信頼しています
“最後に二人が恥をかくことになるのです”
- 207 王は彼らに答えました―“友たちよ、よくやってくれました
“そういう取り決めにしてくれました
“しかしそれを実行するにはあなたたちは悪い時に来ました
“娘は病気で、聞き及んでいるでしょう
- 208 彼女は研鑽で痩せ細っています
弱さから病気になったのです
運悪くひどくなってしまい
医者彼女の命に絶望的です
- 209 “しかしこの事はあなた達に関わりがあることだとは思いません
“あなた達は字が書けるのだから、各々手紙を書きなさい
“あなた達の名前と、どんな結納を彼女に贈るのかを
“彼女が選ぶものが受け入れられたと思いなさい”

- 210 彼らは字が書けたので各々手紙を書きました
自分の手で名前を書きました
自分の土地、町、山々、平原も
そしていかに素晴らしい一族の出であるかも
- 211 王はそれらの手紙を自分の指輪で封印して
これ以上の印でそれらを封印はできなかったでしょう
寵臣であるアポロニオに渡しました
城の婦人のもとへ届けるように
- 212 アポロニオはすぐに命令を実行しに行き
言われたようにそれらの手紙を婦人に届けました
彼女はアポロニオが非常に興奮してやって来るのを見ると
目論んでいた事を彼に明かそうとはしませんでした
- 213 “先生、と彼女は言いました、私はあなたに伺いたい
“こんな時間に何がお望みですか、何をなさろうとしているのですか
“こんな時間にあなたはここにおいでになりません
“こんな時間に決して私に稽古をつけてはくさいません”
- 214 アポロニオは彼女の意図が分かりました
“娘よ、と彼は言いました、私はあなたに稽古をつけにきたの
ではありません
“この事はよく分かってください
“ご褒美に価する知らせをあなたに持って来たのですよ

- 215 “あなたの父上の王様は気晴らしに出かけました
“昼食を取りに戻る時間まで
“あなたに求婚するために三人の王子が来ました
“皆美しく高貴で素晴らしいお方です
- 216 “父上は華々しく彼らを迎えました
“しかし何と言ったら分かりませんでした
“彼らすべてにそれぞれ手紙を書くように命じました
“彼らの中から誰を選ぶのか考えてください”
- 217 彼女は病気でしたが手紙を受け取り
開けて三度まで読みました
しかし手紙にも印にも
彼女が結婚したいような名がありませんでした
- 218 彼女はアポロニオを見て、深いため息をついて言いました
—“私のテュロスの良き王であるアポロニオよ、私に言ってください
“この結婚についてあなたの意見を聞きたい
“あなたに気に入るか気に入らないか、あなたの意向を伺いたい”
- 219 アポロニオは返答し、非常な分別をもって話しました
—“ご婦人、もし私の意向など気にしているなら、とんでもない
ことですよ
“王様が気に入るあなたの幸福になることを
“もし私が邪魔でもすれば、それは狂気の沙汰です

- 220 “そしてあなたには私の知っていることをちゃんと教えました
“皆が私の鍛錬のおかげであなたをより評価するでしょう
“これから先あなたが回復して結婚すれば
“私はあなたの名声をととても喜ぶでしょう
- 221 —“先生、と彼女は言いました、もしあなたが愛されているなら
“他の者にあなたの苦勞話しを聞いてもらうことは望まないで
しょう
“私は確かめるまでそんなことは決して信じません
“テュロスの王に私が無視されるなんて
- 222 彼女は手紙を書き、蠟で封をして
それを伝令役のアポロニオに渡しました
砂浜にいた王に届けるようにと
それは直ちに行われたことをお知りおきください
- 223 王は手紙を開けて読ませました
手紙にはこう書いてありました、良く書けていました
彼女は旅人と結婚したい
彼は身一つで海から逃れたのだと
- 224 王はこの事に驚き
書いてある事の重大さが理解できませんでした

彼はその幸運な王子は誰なのか尋ねました
波と怒り狂う海と戦った王子というのは

- 225 ずる賢いと思っている彼らのうちの一人が言いました
確かな名はアギロン¹⁴⁾という者です
—“王様、それは私です、確かです
“というのは木片に捕まってやっと逃れたのですから”
- 226 彼らのうちの別の一人が言いました—“それは明らかなウソです
“私は君がひどい事を言うのをよく知っている
“私たちは一緒に育って、何も起こらなかった
“君が決してそんな危険な目に合わなかったのを私はよく知っている”
- 227 彼らがこの様に言い争っている間に
王にはウソをついていることがよく分かりました
彼は心の中である良い計画を思いつきました
というのは彼は優れた頭脳と深い知識の持ち主だったからです
- 228 王はアポロニオに読むようにその手紙を渡しました
もしかして事の次第が分かるかと思って
テュロスの王は何の事だか分かると
顔全体が赤くなり始めました
- 229 アルチトラストレス王は次第に事に気づき
心が動揺して行きました

アポロニオの襟首に手をかけ

他の者を一人も連れずアポロニオとその場を離れました

- 230 アルチトラストレス王は言いました―“師であり友であるお方よ、私は誓って言うが

“私があなたに抱いている愛情の故に

“あなたがこの事をどう考えているのかを私に言ってほしい

“もしそうしてくれなければ、あなたの名声などどうでもいいことです”

- 231 アポロニオは答えて言いました―“王様、あなたは私をととても困らせています

“辛辣な言葉で私をととても苦しめています

“この長い手紙は私の事を言っているのだと思います

“しかしもしあなたのお気に召さないなら、わたしにとってつらいものです”

- 232 王は忠義者の彼に答えました

―先生、私はあなたにウソはつくまい、裏切りになりますから

“彼女がそれを望むなら、心から喜びます

“まったく条件なしに彼女を受け入れてください”

- 233 彼らは話を中断し、王子たちのところに戻りました

―“友たちよ、と王は言いました、私はあなたたちを争わせたくありません

“あなた方の思う道を行って、他の策を見つけてください

“というのは私はこの事を少しばかり分かりかけてきたので”

234 すでに食事の時間だったので彼らは街に入り、
病気の王女に会いに城に上りました
彼女は王が自分のそばにいるのを見ると
さらに具合が悪くなり、震え始めました

235 —“父上、と彼女は弱々しい声で言いました
“こんな時間に何かご用ですか、御出での訳は何ですか
“私は心が重く、とても苦しいのです
“こんなに父上の食事が遅くなるのですもの”

236 —“娘よ、と王は言いました、私の事で嘆くことはない
“お前の事の方がもっと心配だ、こんなに重い病気なのだから
“私はお前にちょっと話がしたい、怒らないでくれよ
“本当のことを私に言ってくれ、お前は誰と結婚したいだ”

237 —“父上、聞かれたのだから申し上げます
“もし父上がアポロニオから他の者に替えるなら
“私はあなたにウソは申しません、この事は覚えておいてください
いよ
“父上が生きている限り、私の立ち姿を見ることはないでしょう”

238 —“娘よ、と王は言いました、私はとても嬉しい
“こんなに素晴らしい選び方をするなんて、神の御意志によるもの
のだ

“お前が求めたこの事が叶えられるように
“お前が望んだのだから私たちは皆気に入っているよ”

- 239 このやりとりが終わり王が中庭に出ると
入り口のところで娘婿に出会いました
二人はおごそかな取り決めのうちに事を確認しました
するとすぐに王女の病が軽くなって行きました
- 240 豪華で豊かな結婚式が執り行われ
多くの人が式に招かれました
式は何日も果てしなく続き
長い間忘れられることはありませんでした
- 241 新婚夫婦の間には非常に大きな愛情が芽生えました
創造主が彼らに祝福を与えたのです
男が女に、女が男に
この世でこれ以上の心で仕えたことはありませんでした
- 242 ある日アポロニオは海岸に出ました
彼と共に優しい伴侶である妻を伴って
結婚して7ヶ月経っていたでしょうか
妻はすぐ最初の週に妊娠しました

- 243 この様に歩いて、すでに帰ろうとしていたところでした
彼らはすでに錨を下した一艘の舟を見ました
彼らには美しい、豪華に飾り立てた舟に見えました
アポロニオはそれがどこから来たのか知るために
- 244 舵を取っていた船長に聞きました
どの土地から来たのか本当のことを言うように
高い所にいた水夫は言いました
大体はティロスで過ごしていたと
- 245 アポロニオは言いました―“私はそこで育ちました”
水夫は言いました―“その通りだといいいんですが”
アポロニオは彼に言いました―“許してくれるなら、
証拠となる物を見せることができます”
- 246 そうしてくれればとても嬉しいと水夫は彼に言いました
―“あなたが私にそんなに言うなら、私はあなたの事が知りたい
“アポロニオ王のことを見分けられるかどうか”
水夫は言いました―“自分自身のことの様に、これは信じてくだ
さい”
- 247 ―“もしあなたが彼を知っているなら、と水夫が言いました
“あるいは誰か占い師によって彼を見つけることができた
“あなたの喜ぶような利益を得ることができるでしょう
“それは歩兵も騎士もそ以上の物をもらったことのないようなも
のです”

- 248 “アポロニオにアンティオコスが死んで葬られたと伝えてください
い
“彼と共に悪魔が彼に与えた娘も死にました
“悪魔の光線が二人を滅ぼしたのです
“彼に王位を与えるため皆が彼を待っています”
- 249 アポロニオは陽気に妻の方を向いて
言いました―“こんな事は信じないでしょう
“私はウソはつきたくありません
“確かに嬉しい気はしました
- 250 “しかし創造主が私たちにこのような利得を与えてくれるなら
“裏切り者にも同じように復讐してくれるはずです
“私は我らの主なる神と共にその利得を受けに行くつもりです
“というのはアンティオキアはそんなにわずかな榮譽ではないからです
- 251 ―“ご主人様、と婦人は言いました、私は妊娠しています
“身ごもって7ヶ月以上経ちます
“旅行するには準備ができていません
“というのは出産するまでは非常に危険だからです
- 252 “神がお望みなら、私は間もなく出産するでしょう
“運が良ければ今すぐにでも産むでしょう
“もしあなたが海岸から遠く離れていたとしても
“あなたの女王を励ますためにそこから来るべきでしょう

- 253 “あなたが待ってくれるにしても、すぐ出発するにしても
“私を連れて行ってください、私を置いて行かないでください
“もし私をここに置いて行くなら、私はとても悲しい
“あなたの大きな望みのためなら、私は危険を冒せます”
- 254 アポロニオは言いました―“女王よ、よく知っておいてください
“あなたの父上の同意さえ得られれば
“あなたを私が継いだ土地に連れて行きます
“あなたが満足するように結納金も払います”
- 255 彼女は父に言いました―“父上、お願いですから
“喜んで私に許可してください
“アポロニオは自分の継いだ土地を見に行きたいのです
“もし彼と行かなければ、私は本当に死んでしまいます
- 256 “アンティオコス王は彼に怒っていたのですが
“急死しました、亡くなったのです
“皆が彼に王国を継がせたがっています
“もし私が彼と行かなければ、私の運は尽きてしまいます
- 257 ―“娘よ、と父王は言いました、その通りだ
“もしアポロニオが旅に出たいと望み
“お前を連れて行きたいと思うなら、お前は道連れになりなさい
“我が娘よ、神が、その真の力がお前を導いてくださるよう
に”

- 258 直ちに船が用意され
動物や金銀や食料が積み込まれました
軽くなるように獣脂をたっぷり塗って
不吉な船に折悪しく乗り込んだのです¹⁵⁾
- 259 王は娘に旅のお供として
彼女を育てた乳母のレコリデスを付けてやりました
王はまた産婆をたくさん、そして一人の優れた産婆を同伴させました
王国全土で彼女にかなう者はいませんでした
- 260 王は二人を右手で祝福し
いと高き所にいる創造主に願いました
娘を冬も夏も導いてくださるように
娘婿が無事に戻って来るよう守ってくださるように
- 261 船が早く進むように帆が上げられ
岸から錨を上げるように命令が出されました
風が帆をはためかせ始め
船は陸地から遠ざかって行きました
- 262 船が出帆する時が来て
お互いに別れを告げなければならなくなると

地に落とされた涙は多く
涙を流さなかった目はわずかでした

263 風は涙によって弱ることはありませんでした
船を急かせて進ませ
非常に遠くまで運んでいったので
もう岸からは見えなくなりました

264 神に願った順風でした
波はこれ以上ないほど穏やかで
風も波も皆アポロニオに償おうとしていました¹⁶⁾
彼に及ぼした不当行為や害を

265 海は平らな道のようにでした
皆陽気で、一行は無事でした
アポロニオもルシアナもはしゃいでいました
彼らは苦しみ喜びの姉妹であることを知らなかったのです

266 海岸からかなり遠い所まで来ていました
海をすばやく渡ったようでした
運命が彼らに罠をしかけました
これ以上ひどい罠は誰にもしかけられたことはありませんでした

267 あなた方には他の機会に話しましたが
婦人は長い間身重でした
長い移動と旅で

妊娠9ヶ月になっていました

268 出産の時が来たとき

初産婦は陣痛を感じました

それは死にたいと思うほどの苦痛を彼女に与えました

彼女は女は決して妊娠すべきではないと言いました

269 時が来ると、赤ん坊が生まれました

とても可愛い、非常にりりしい女の子でした

しかし準備が十分でなかったので

非常に危険な状態でした

270 婦人は出産の時見てもらえなかったので

内出血が起こり

出産後の洗浄もよく行われませんでした

人が気づいた時には、彼女は死んでいたのです

271 しかし彼女は死んではいませんでした、弱っていたのです

出産で死んだようになっていたのです

彼女には生きている何の兆候も見られませんでした

皆んな彼女が死んだものと思っていました

272 皆んな声をあげて、呼びました―“ああ、ご婦人

“私たちはあなたと悪い時にペンタポリスを出発しました

“あなたに死なれたたら、私たちは今どうしたらいいのでしょうか

“ご婦人、私たちはこんな悪い時期にあなたを失うのです

273 水夫がこの不吉な騒ぎを聞いて

急いで舵のところから降りてきて

アポロニオに言いました―“あなたがたどうしたんですか

“死人を置いておくと、私たちは皆遭難します

274 “誰の遺体であろうと、海に捨ててください

“そうしなければ、私たちはすぐに危険にさらされることになる

かもしれません

“急いでください、ぐずぐずしないでください

“悠長に構えていることはありません

275 アポロニオは答えました―“水夫さん、もう黙りなさい

“君は変なことを言うね、君はどうも兵士のようなね

“彼女は高貴な女王だ、貧しい巡礼とは違う

“君の言うことを聞いていると君は残酷なようだね

276 “彼女は私に対して大変な恩恵を施してくれました

“私が貧しい身寄りのない者であってもためらいませんでした

“つらい貧しさから私を救ってくれました

“男に対して女がこんなに尽くしてくれたことはありませんでした

277 “私の心はどんなに苦しむでしょう

“このような伴侶を私が見捨てるなんて

“私が彼女と死ぬ方がずっとましです
“こんなに卑怯に私から彼女を引き離すより”

278 水夫は言いました―“あんたは見栄からそんなことを言っている
“我々が置かれたこの状況でバカなことを言い張っている
“そのことで逆らうなら、私たちをもっと怒らせることになりま
すよ
“私はあんたが間違っていると思う、そんなに分かりが悪いなん
て

279 “もし死体をこのままにしておいたら、わずかな時間で
“私たちは皆んな死んでしまうでしょう、逃れることはできませ
ん
“母親が死んでも、いい娘が残っています
“アポロニオ、こうなったのもあんたの運が悪いのです

280 アポロニオには自分たちが難破するかもしれないと良く分かって
いました
でも彼は心を納得させることができませんでした
しかし水夫を信じざるを得ませんでした
すでに波が逆巻き始めるのを見ていたのです

281 習慣通り遺体に芳香油を塗り
軽い木材で棺を作りました
接着剤と蠟で棺に板を貼り付け
それを極上の布で包みました

- 282 遺体と共に彼女の良き伴侶が
棺に40枚の上質の金貨を入れました
そして鋼鉄のノミで銅板に書きました
彼女を見つけた人が身元がはっきりわかるような文字を
- 283 儀式がすべて終わると
遺体はちゃんと封印され、棺がしっかり閉じられました
多くの涙が流され、男は顔を掻きむりました¹⁷⁾
そして棺は皆の悲しみのうちに海に投げ入れられました
- 284 それから三日後太陽が登るころ
遺体はエフェソスの港に流れ着き
良い医者に見つけられました
というのは彼は学問のある、とても博識な弟子を持っていたから
です
- 285 よりゆったりと生き、気ままに生活するには
人は街路から外れたところでよりよく生活できるので
彼は住んでいる所に、全財産を持っていました
海岸で、山に囲まれた所に
- 286 彼は風に吹かれるために海岸を歩いていました
良い弟子を百人以上連れていました
すると彼らはこの大きな張り物細工を見つけました
それは海水で全然傷んでいませんでした

- 287 医者はそれを自分の家へ運ばせました
鍛冶屋を呼んで開けさせると
あなたがその話を聞いた遺体を見つけました
医者は悲しみのあまり泣き始めました
- 288 彼らはくっきりした顔立ちの若い女性を見たのです
均整のとれた体で、豪華な衣装を身にまとっていました
そばには多くの財宝があり、立派な棺に入れられていました
しかし遺言については何も知ることができませんでした
- 289 棺の端の離れた隅に
人々は銅板に刻まれた文面を見つけました
医者がそれを取り読んで
言いました―“もし私がこの通りにしなければ、私が救われるこ
とがないように”
- 290 私はあなた方に書かれたものの内容をお話したい
《私、アポロニオ王は慈悲を乞うために書き送ります
》彼女を見つけた人は彼女を葬ってください
》それは海の上では私たちができなかった事です
- 291 》財宝の半分は骨折り賃として取っておいてください
》残りは彼女の魂のために修道院に渡してください
》聖職者たちは彼女のために快く墓地に行ってくれるでしょう
》そして侍者たちは喜んで詩篇を唱えてくれるでしょう

- 292 》もしこれができなければ、創造主に願いなさい
》死後も生きていても、神のご加護などありませんように》と
その時医者が言いました―“そうなるか、もっと悪い事が起こる
でしょう
“もしこれがその通り、あるいはもっと良くできなければ”
- 293 医者は遺体を取り上げて、寝台に寝かせるように命じました
それは多くの財宝をもってしても作れるような寝台ではありません
でした
彼は然るべく彼女にすべての儀礼を施しました
もしそうしなければ恨みを買っていたでしょう
- 294 埋葬のためすべての事がなされ
まったく滞りなく葬られると
かの非常に頭の良い弟子が入って来ました
師のもとへ許可を得てやって来たのでした
- 295 ―“息子よ、と師は言いました、君は私にとっても良くしてくれました
“この様な時に来てくれてとても感謝しています
“私たちは他でもない葬儀を行っているところです
“私たちが見つけた遺体は君が聞いていることと思います
- 296 “神がこの様に折良く君を導いてくださったのだから
“君の師と共にこの式に加わりなさい
“この遺体に儀礼を施しましょう、義務であり、道理ですから

“君の取り分である五分の一を君にあげよう

297 “君の善良さと私の愛で

“瓶にある最上の芳香油の取り

“君は物知りだから、遺体によく塗りなさい

“これ以上ないほど丹念に”

298 弟子は善良で、有能な師でもありました

背負っていたマントを脱ぎ、

よく知っていたので、混じりけのない芳香油を取り

寝台に横たわっている遺体に近づきました

299 彼は遺体が身につけている衣服を取るように命じました

着ている高価な服を脱がせたのです

自分でできる事は他の者にはさせませんでした

誰もそんなに首尾よくはできなかったでしょう

300 塗油¹⁸⁾の準備ができていました

その祝福された男は非常な愛情をもって

彼女の心臓の上に手を置きました

するとわずかな鼓動を感じたのです

301 芳香油を拭き取らせ服を着せました

心臓が鼓動するか見て

彼のできる他の術を施しました

そしてもしかしてまだ生きられると思いました

- 302 弟子は戸口にいる師の方へ行きました
—“先生、私たちが死んでいると思っているこの女性には
“私の診断が間違っているとお思いにならないとは思いますが
“私をととても励ますものがあります
- 303 “私は彼女のうちに命の息吹を感じます
“魂がまだ彼女の体だから抜け出ていないからです
“注意不足から気を失っているのです
“許してもらえれば、私が彼女を治しましょう
- 304 —“息子よ、と師は言いました、君はととてもありがたいことを
言ってくれた
“息子が父にこれ以上のことは言えないだろう
“もし君がそうすれば大変な名誉になる
“今日いる医者の中で君は最高だ
- 305 “もし君がそれをするなら、君の名は決して死に絶えはしないだ
ろう
“君が生きている間、君は私の大きな誇りとなるだろう
“君が存命中も死後も、君は名声を保つだろう
“そして男も女も君の知性について語るだろう
- 306 弟子は直ちに遺体を自分の家へ運ばせました
自宅で自分なりに彼女にもっとしてあげるために
彼はよく乾いた薪で大々的に火をおこさせました
煙を出さず、あまり熱くならないように

- 307 彼は掃き清めた床の上に遺体を置かせました
それから柔らかい布団を敷いた豪華な寝台の上に
顔の上には服の袖を掛けました
過度の熱から顔を守るために
- 308 燃え盛る火の熱で
彼は熱い弛緩作用のある軟膏を作りました
それを進んで手で彼女に塗ると
彼女の力ない魂がわずかに息をしました
- 309 その上油を温めさせ
そこで羊毛をゆでるように命じました
そしてこの羊毛で彼女の体を包ませました
誰もこの様な療法のことを話すのを聞いたことがありませんでし
た
- 310 薬が内臓にまで入っていききました
固まっていた血が溶けていききました
締め付けられていた魂が息を吹き返し
病んでいた病人が一度息をしたのです
- 311 その医者はこの兆候にとっても喜びました
治療がもう効果を發揮していると判断し
この治療法をもっとしっかり始めました
そしてわずかな時間で彼女に非常な回復を示させました

- 312 ものが飲み込める頃だと見ると
彼がそこで混ぜることを知っている他の薬と
油を喉に入れて飲み込ませました
すると婦人は汚いものを吐き出しました
- 313 それから少しすると彼女は目を開けました
どこにいるか分からず、何も言うことができませんでした
医者は彼女の命と同じくらい
何か言葉を彼女の口から聞くことを望みました
- 314 しかし神がそのように望んだ時には、かなり時間が経っていました
彼女は猫のように弱々しい、疲れた声をあげたのです
—“アポロニオはどこにいるのですか、私は彼を探しているので
す
“彼は私のことを自分の靴ほどにも大事に思っていないと思います”
- 315 記憶がよみがえり、意識が戻ったのです
美しい眼差しであたりを見回しましたが
お付きの者たちも夫も見あたりませんでした
見知らぬ人たちと知らない場所を見ただけでした
- 316 —“友よ、と彼女は自分を癒してくれた医者に言いました
“お願いだから、私がどこで病に伏しているのか言ってほしいの
です

“私は周りの人々と私の土地から別れたのは知っています

“もし神が助けてくださらないなら、私は迷子です

317 “私にはあなたは良い人に見えます、何事も隠さずに申しましょ
う

“私は王の娘で、王と結婚しました

“どのようにして私がここにたどり着いたのか分かりません

“私は辱めを受けるのを非常に恐れています”

318 師が如才なく言いました

—“御婦人、元気を出してください、恐れることはありません

“創造主のおかげで、あなたは守られていると思ってください

“あなたは今までにないほど元気になるでしょう

319 “ゆっくり横になっていてください、他のことはお願いしません

“私の母に仕えるように、あなたにお仕えしましょう

“あまり心配すると、また悪くなりますよ

“私たちのこの療法が全部無駄になることになります

320 婦人は静かに横たわって、もう何も話そうとしませんでした

良き弟子が師を迎えに行きました

—“先生、と彼は言いました、私はあなたにご褒美を要求しなければなりません

“御婦人は回復しました、それはよくお分かりいただけるはずです”

- 321 師は間を置かずすぐにやって来ました
御婦人が弱ってはいるが生きているのを見て
弟子にきっぱりと言いました
彼の療法は比類無きものだと
- 322 二人は御婦人が起き上がるまで世話をしました
この世で誰もこんなによく世話をしてもらった婦人を見たことが
ありませんでした
医者たちの優秀さは非常なもので
何か名のある本に書かれるべき程のものでした
- 323 彼女が回復して、病から解放されると
医者らは自分が直した婦人を養子にしました
人々は彼女の財宝から一銭も取りませんでした
すべてを彼女のためにとっておき、何も使いませんでした
- 324 彼女が貞操をしっかり守るために
人々は彼女に修道女として生きる修道院を作りました
彼女の夫が来るのを神が望むまでそうするように
そして彼女は他の修道女と共に創造主に仕えていました
- 325 私たちは御婦人に修道院をまかせ
教会に仕え、詩篇を唱えておいてもらい

話をアポロニオ王に戻しましょう

彼は冒険で大変な辛酸を舐めたのです

326 妻が海に投げ入れられた時から

王はいつも悲しんで、苦悩の生活を送っていました

いつも顔を涙で濡らしていたのです

泣かずに夜が明けたことはありませんでした

327 お供の者たちが顔をかきむしり¹⁹⁾、王が独り身になり

彼らは運命を呪いながら航海を続けました

聖霊が彼らを導き、海は穏やかで

王は愛しの土地タルソに着きました

328 アポロニオは非常な哀しみに打ちひしがれていて

知られた顔なので、人に見つかりたくありませんでした

そこで親愛なる宿主の家へ向かいました

かつて滞在したエストランヒロの家です

329 アポロニオは迷わずにその家へ行きました、以前に知っていたからです

かつてのように陽気には入りませんでした

家の婦人たちに挨拶しましたが、微笑みはしませんでした

皆は彼が非常に悲しげに入ってきたので驚きました

330 そこから出て行った時にいた男たちのうち

寵臣も誰も見あたりませんでした

丁寧な言葉ももう忘れてしまっていました
人々はこのことに非常に驚きました

- 331 一行の中に生まれたばかりの女の子がいました
その子は金の刺繍の付いた布に包まれていて
リコリデスという乳母が付き添っていました
ルシアナが乳母にした女です

- 332 家の女主人がとても悲しげに言いました
—“テュロスのアポロニオよ、私はあなたに聞きたいことがある
“あなたの素晴らしいお供の者たちはどうしたのですか
“連れていたあんなにたくさんのお供のうち誰一人戻ったのを私
たちは見ていません

- 333 “あなたの身の上に大きな変化があったようですね
“あなたがすっかり変わってしまったので、ほとんど見分けがつか
きません
“あなたは哀しみに沈んではしゃぐことができなくなりました
“おねがいですから、あなたの身の上に起こった事を知らせてく
ださい”

- 334 アポロニオは納得して答えました
さめざめと泣きながら
事の顛末と苦難を語りました
いかにして海で従者全員を失ったかを

- 335 アポロニオは彼らにどのような方法でそのように辛い目にあって
逃れられたのか話しました
どのようにしてペンタポリスに入ったのか、どのように招待され
たのか
どのように王の前で歌ったのか、そしてどのように結婚したのか
どのようにしてそこからそんなに立派なお供をつれて出発したの
か話しました
- 336 アポロニオは彼らにどのように婦人を失ったのか話しました
どのように愛する妻がお産で死んだのか
死んだ後彼女をどうしたのか
この女の赤子がどのようになったのか話しました
- 337 アポロニオ王の宿主たちはこれを聞くと
悲しみのためもう少しで気を失うところでした
彼らはできるだけのお悔やみを述べました
そこで亡くなったのならそれほどにはしなかったでしょう
- 338 人々がしかるべきお悔みを述べた後
誠実な主人はアポロニオのところに戻って
―“王様、と言いました、あなたにお願いがあるのですが
“私があなたに申し上げる事を聞いていただきたいのです
- 339 “この世の成り行きをあなた自身確かめたでしょう
“一つの状態に留まることを知りません
“与えたり奪ったりは世の常です

“誰が泣こうが笑おうがおかまいなしです

- 340 “あなた自身よくそれが分かるはずです
 “もし心があるならそれを知るはずです
 “あなたほど得て失うということを知っている人はいません
 “この苦しみであなたは大きな利益を得ます
- 341 “そういうことは誰にも長くは続かないものです
 “もし運命がそれを許さないとしたら
 “だから人は負けたと嘆いてはいけません
 “なぜなら嘆いてもとり戻せませんから
- 342 “私たちは皆あなたの喪失を悲しんでいます
 “女王様が生きていれば私たちは皆嬉しいと思います
 “彼女がいないのでから私たちは残念です
 “しかし彼女のために私たちが途方に暮れていたら私たちはとても不幸です
- 343 “もし私たちが泣いたり悲しんだりして彼女を取り戻せるなら
 “私たちは今地面を涙で満たすでしょう
 “しかし死が彼女を経帷子で包んだのだから
 “私たちは彼女が祖父²⁰⁾にしてあげたことを彼女にしてあげましょう
- 344 “母親が良い人だったなら、良い娘を私たちは持つことになりま
 す

“母親の代わりに私たちは娘の面倒をみましょう
“その上、少しでも何かもっていれば
“私たちは何も失わなかったとすることができます”

345 アポロニオは次の様なことを答えました
—“ご主人、私たちは神を責めることができないので
“神が決めたことはすべて起こります
“神が与えようとすることは、すべて耐えなければなりません

346 “あなたに娘を託します、差し上げますので育ててください
“彼女の世話をできる乳母のリコリデスと共に
“私は髪も爪も切りたくありません
“彼女に良い結婚をさせてやるまで

347 “このことが達成され、仕上がるまで
“アンティオコスの王国のことは先伸ばしにしようと思います
“ペンタポリスにもテュロにも入りたくありません
“私は居ただけエジプトに居たいのです”

348 アポロニオは大切な女の赤子を彼に託し
その子に莫大な財産と多量の衣類を残しました
そして乗船し、直ちに出帆して
船上で十三年も過ごしました

349 タルソのエストラニヒロと妻ディオニサは
この女の子を非常に大事に育てました

彼女に多くのマントと多くの黒と灰色のテンの毛皮を与えました
多くの上等のチュニカと多くの上等のシャツも

350 二人はその女の子を非常な愛情をもって育て
彼女が七才になると学校に入れました
彼女は文法をよく覚え、ビルエラを上手に弾けるようになりまし
た
車輪の鉄を研ぐようによく鍛錬しました

351 タルソの町の人々は彼女を愛しました
というのは彼女の父が彼らに対して善意を示したからです
もしあなた方が彼女の名前をちゃんと知りたいのなら
人々は彼女をタルシアナと呼んでいます、これは本当です

352 彼女が十二才になった時には
すべての学芸に通じ、完璧な師になっていました
その美しさは類を見ませんでした
その魅力でタルソの町全体を魅了していました

353 勉学を休もうと思った日は一日もありませんでした
何かを覚えようとする意思があったからです
とても苦しいこともありましたが、それも喜びになりました
非常な誇りを持って何か役に立ちたいと思っていたからです

354 大体第三時²¹⁾頃だったでしょう
生徒たちが昼食を取りに来る時に

タルシアナはその習慣に従おうとしませんでした
課を覚えてから昼食にやって来るのでした

- 355 彼女を育てた乳母リコリデスが
重い病気になり、非常な不安に落とし入れられました
乳母は食事を取ることができませんでしたが
寝台の端に腰掛けました
- 356 “娘よ、とりコリデスは言いました、私は死にそうです
“でも死ぬ前にあなたに尋ねておきたい
“あなたの考えでは、どこを自分の地だと思っているのですか
“あなたは誰を父上、母上と考えるべきなのですか”
- 357 “乳母よ、と婦人は言いました、私の考えでは
“タルソが私の地で、他の所は知りません
“エストランヒロが私の父で、彼の妻が私の母です
“いつもそう思っていましたし、今もそうです”
- 358 “聞いてください、とりコリデスは言いました、私が育てたご
婦人よ
“もしそう思っているのなら、騙されています
“というのは、あなたの価値はもっとずっとすごいものです
“聞いてもらえるなら、確かなことをお話ししましょう
- 359 “あなたは生まれも出身もペンタポリスで
“アルチトラストレス王があなたの祖父です

“その娘ルシアナが、常にあなたに申し上げていますが
 “その方があなたの母上です、彼女は大きな悲しみを残しました

360 “高貴な騎士であるアポロニオ王が
 “その方はテュロスの出身で、たくましい指導者ですが
 “その方があなたの父上で、今は巡礼となっています
 “エジプトの地を巡礼者として回っています”

361 乳母は初めから全部話を語りました
 どのようにして不吉な時に航海に出たのか
 どのようにして計らずも彼女と結婚したのか
 若い彼女がどのようにお産で亡くなったのかを

362 乳母は父上がどのように誓いを立てたのか彼女に語りました
 彼女に良い結婚をさせてやるまでは
 彼女の血筋が名誉あるものであるように
 どんなに嬉しくとも髭を剃らないと

363 乳母はこのことを語り告げ
 王女がすべてを心に留めると
 言葉が失われていき、最後の時が来ました
 乳母はこの世とその喜びに別れを告げたのです

364 リコリデスがこの世を去ると直ちに
 彼女に育てられた良き王女は遺体の準備をしました
 経帷子をしっかりと着せ、立派に埋葬し

毎日ろうそくを灯し、供え物をしました

365 エストランヒロに育てられたタルシアナ王女は
非常に善良に、そして完璧なそつのなさをもって育ったので
タルソの人々にとても愛され
彼女を生んだ母親のようでした

366 次の週の祭日に
エストランヒロの妻ディオニサが朝通りを通っていました
タルシアナ王女が傍にいて
もう一人妹の少女²²⁾がいました

367 通りを通っても、横丁を通っても
皆んなタルシアナ王女のことを取りざたしていました
彼らはディオニサもその連れも
タルシアナと比べればどうでもいいと言っていました

368 もう少しでディオニサは嫉妬でわけが分からなくなるところでし
た
悪魔の勧めを聞くことになったのです
結局すべてが彼女に降りかかりました
この声をディオニサは実行することにしたのです

369 密かに王女を殺させようと思いました
というのは父親が彼女を探しにくるはずはなかったからです
父親が与えた財産を自分の物にできるでしょう

そうでもしなければ嫉妬の傷は癒えないでしょう

370 邪悪な殺人者は心の中で言いました

—“もしこの子が殺されれば

“この子を美しくしているこれらの飾りで

“私が生んだ娘を嫁がせよう”

371 悪女がこの裏切りを考えていると

卑劣な召使が入って来ました

牢に繋がれていた卑しい家柄の男です

彼はわずかな報酬で重大な悪事を犯しかねません

372 彼の名は、もしあなた方が知りたいのなら、テオフィロといいま
す

もし信じないなら、歴史で確かめてください

悪女はあなた方が聞くことになることを考えました

この男はそのような罠を仕掛けることに精通していました

373 彼女は後で密かに彼を呼んで

自分の意向をすべて聞かせました

もしやりとげたらと固く約束しました

大金を与え、まったく自由にしてやると

374 その男はまだ疑って尋ねました

どのように、そしてどこでいつ実行するのかと

悪女は彼に明日待ち伏せるようにと言いました

王女がリコリデスのために祈っている時に

- 375 その哀れな男は困窮から抜け出すために
朝早く起きて墓地に向かいました
ナイフを研ぎました、邪悪な任務を遂行するために
そして詩篇の詩を唱えている王女を殺すために
- 376 王女は習慣通り早朝
パンと明かりを持って墓地に行きました
香を用意して明かりをつけ
落ち着き払って祈り始めました
- 377 王女が朝の祈りを唱えていると
裏切り者は待ち伏せていた所から姿を現し
彼女の髪をつかんで剣を抜き
もう少しで頭を切り落とすところでした
- 378 —“友よ、と彼女は言いました、私はお前を苦しめたことはない
“お前が私を殺さなければならぬようなことは私にはない
“私が死んでもお前にとって何の得にもならない
“ただ大罪を犯すだけです
- 379 “しかしもしお前の手から逃れることができないのなら
“創造主にちょっと祈らせて欲しい
“お前には十分な時間があるはずです
“私には犯した罪のために助けに来てくれる人がいない”

- 380 男は頼みを聞いて少し困惑しましたが
言いました、—“神は私が喜んでそうすることを助けてくれるで
しょう”
しかし素早く済むようにしていただきたい
というのは私は時間を引き延ばせないのだから
- 381 王女は身をかがめて、泣き始めました
—“主よ、と彼女は言いました、あなたは太陽を命じるままにで
きるお方です
“そして月を満ちたり欠けたりさせることがでるお方です
“主よ、地においても、海においても私をお助けください
- 382 “私は見知らぬ地で、身寄りもなく育ちました
“母は亡くなり、父については何も知りません
“私は故無く苦しむことになります
“主よ、あなたがそれをお認めになるなら、私は満足です
- 383 “主よ、もしあなたが正義を行うことをお望みなら
“もし私がそれに値しないとしても
“私を助けるために何か策をお持ちのはずです
“この裏切り者が私を打ち負かすことができないように
- 384 タルシアナ王女がこのように祈って
その心痛と苦悩を嘆いていると
神はこの孤児に憐れみと同情を示され
彼女に助けを送り、その願いを聞き入れました

注

- 11) どちらも古い弦楽器
- 12) 重さの単位、地方差があるが 100 ポンド、46 キロ
- 13) この連は 1 行欠けている
- 14) Aguylon
- 15) この一文 Entró, en fuerte punto, con naues auesadas. は色々に解釈されている
- 16) 異なる解釈がある
- 17) 悲しみの印に顔を掻きむしる習慣があった
- 18) 「終油の秘跡」のことで臨終のときに受ける秘跡、現在は「病者の塗油」という
- 19) 注 17 参照
- 20) 彼女の祖先のことであろう
- 21) 当時は日の出から日没までを十二に分けていたので、現在の午前九時頃であつたろう、従って次行の昼食は朝食のことだと思われる
- 22) エストランヒロとディオニサの娘のことか

参考図書・辞書

- Libro de Apolonio Edición de Manuel Alvar Editorial Castalia 1976
- Libro de Apolonio Odres Nuevos Editorial Castalia 1969
- Libro de Apolonio Edición de Dolores Corbella Cátedra Letras Hispánicas 2011
- アレクサンドロスの書・アポロニオの書 橋本一郎 大学書林 1991
- Diccionario Medieval Español Martín Alonso Universidad Pontificia de Salamanca 1986
- Diccionario de Castellano Antiguo Manuel Gutiérrez Tuñón Editorial Alfospolis 2002
- Tentative Dictionary of Medieval Spanish Lloyd A. Kasten and Florian J. Cody The Hispanic Seminary of Medieval Studies New York 2001
- Diccionario de la Lengua Española Real Academia Española Espasa 2001
- スペイン語大辞典 白水社 2015